

「よくある間違い」(Moodle版)を活用した英文法の授業改善 - アクティブラーニング型授業の試み -

小田 智代, 小玉 智治, 堀江美智代, 永正理恵子

English Grammar Class Improvement Using “Common Mistakes” (Moodle version)
- An Active Learning Approach in English Grammar -

Tomoyo Oda, Tomoharu Kodama, Michiyo Horie and Rieko Nagamasa

18歳人口の減少にともない、大学・短期大学における学生たちの学力は非常に多様になり、この状況にどう対応するかということが、大学教育の大きな課題の一つとなっているのは確かであろう。そうした中、本学英語科では「英文法Ⅰ」において、「JEB ベーシックス」(初年次教育科目)で自主学習用に使用されていた教材「よくある間違い」(Moodle版)を活用し、さらにアクティブラーニング型の授業を導入した。学生の英文法への理解をより深めるとともに、自主的で協力的な学びの姿勢を育成することを目的とした。本稿では、平成29年度前期に行ったこの「英文法Ⅰ」における取組を分析、検証した。プレテストとポストテストを行い、そのテストの点数結果において統計的に有意な差がみられ、学生の理解は深まったと判断できる。また、アンケート結果でも、教材の「よくある間違い」とアクティブラーニング型の授業に対する満足度は高く、一定の成果を得ることができた。同時に、「英文法Ⅰ」におけるアクティブラーニング型授業には改善すべき点も明らかとなった。

Key Words: 英文法, よくある間違い, アクティブラーニング, eラーニング

(Received September 11, 2017)

1. はじめに

18歳人口の減少から「2007年問題」が叫ばれて久しい。また、さらなる人口の減少、そして進学率の頭打ちが拍車をかけ、「2018年問題」、さらには入学試験が改革されることによる「2020年問題」が大学・短期大学に差し迫った問題として現れている。こうした流れの中、より多くの学生を確保するため、AO入試をはじめとして、入学試験の多様化がすすんだ。学力試験の比重が軽くなった分、基礎的な学力が足りない学生が多く入学するということになる。必然的に、受け入れる側はどうしてもそのような学生に対応する授業の内容や形態に工夫をすることが早急に求められることになってきた。

* 鹿児島純心女子短期大学英語科 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

本学にとってももちろん、この問題は避けられない。英語科は、特に平成16年度に文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された以降も、カリキュラムの改善に努め、コア科目については習熟度別クラス編成にし、学生の学力に応じた授業を行っている。さらに必要な学生には個人指導という形もとっている。しかし、現状を見ると、基礎的な英語力が足りない学生に対する対応は十分とは言えない。そこで、さらに組織的な改善、工夫が必要ということで、新しい試みを始めるに至った。それは、「英文法Ⅰ・Ⅱ」で、英語科独自の初年次教育科目「JEB ベーシックス」と連携しながら、すでに自主開発していた「よくある間違い」(Moodle版)を教材の一部として使用し、アクティブラーニング型授業でグループ学習を取り入れることによって、学生が、自主的で、共に学び合う姿勢を身に付けながら実践的に英文法を身に付けることができることを目指すものである。本稿では平成29年度前期の「英文法Ⅰ」と「JEB ベーシックス」という英語科1年生専門科目において行った試みの内容を紹介し、その分析、検証をしたい。

2. 教材「よくある間違い」の開発とその経緯

2.1 「よくある間違い」開発の理由

学生の学力の多様化については教員全体が認識し、これまで通りの指導を行っていくことへ困難さを抱えることとなる。1年生が履修する「生活英語実習Ⅰ・Ⅱ」という科目の一つの取り組みである「英文日記」¹⁾について、一日分の英文を書くことが難しい学生や、何度添削しても同じ間違いを繰り返す学生が現れてきていた。「英文法Ⅰ・Ⅱ」の基礎クラスにおいても同じような間違いを繰り返す傾向は強く認められていた。何年か観察したのち、しかもそうした間違いは、添削して誤りを直しても繰り返され、また毎年学生が変わっても同様の種類の間違いが繰り返されることがわかった。こうした状況は、明らかに日記を書く学生にとっても、それを添削する教員にとっても負担であるし、問題である。そこで、繰り返される「よくある間違い」を取り上げ、学生にあらかじめ理解してもらうことによって、英文日記の添削の負担を軽減できると同時に、英文法を実践的に身に付けるうえで非常に役立つのではないかと考え、「よくある間違い」の取り組みを開始した。

2.2 「よくある間違い」の概要

この取り組みの進行はおおよそ次のような段階を経て行うように計画された。第一段階では、日記や英文法の問題などに現れる学生の「間違い」を集め、その中から「よくある」ものを整理する。第二段階では、「よくある間違い」を学生に理解ができるような形にする。第三段階は「よくある間違い」を学生が学習できる機会、方法をつくる。第四段階は英語科教員全員が「よくある間違い」を共有し、それぞれの担当の科目で活用することによって学生の英語から「よくある間違い」が消えるようにする。

第一段階では、学生の「英文日記」、「英文法」の授業(基礎クラス)で行っている小テストの英作文の問題の答えを中心に、2年から3年にわたって収集した。第二段階では、その中で特に多く集まったものについて、誤った文とそれを訂正した文をまず挙げ、その次に丁寧でやさ

しく、親しみやすい言葉を使い、口語調の文体で説明を加えた。次に、第三段階として、レイアウトを整え、挿絵もつけて「よくある間違い」をテキスト版としてまとめた。当初は、50例ほどをまとめて印刷し、配布していたが、その内容を扱う時間がなく、また冊子にもなっていないため、活用が十分ではなかった。そこで、その解決策として、テキスト版をもとに、eラーニング用のコンテンツを作成し、少しでも学生が手軽に学習できる環境を作った。テキスト版の中から、70項目を選び、問題と解説という形に書き直して、eラーニングコンテンツとしてアップし、さらに平成21年に Moodle 版を制作した。なおこのMoodle版は「JEB ベーシックス」で活用されている。問題の形式は、選択肢型と全文書き直し型の2種類である。このMoodle版の完成により、学生は自分の都合の良い時間に、何回でも学習、練習することができるようになった。

2.3 「よくある間違い」の実例

学生がおかす「よくある間違い」がどのようなものかその内容をいくつか示したい。代表的なものには次のようなものがある。

- ・ I like him. Because he is kind. (接続詞の使い方)
- ・ I like a dog. (可算名詞と冠詞)
- ・ I enjoyed very much. (enjoyの語法)
- ・ There was very beautiful. (日本語直訳、品詞の理解)
- ・ I went to home last week. (品詞の理解)
- ・ My camera is more expensive than her. (代名詞)
- ・ I helped my friend's homework. (helpの語法)
- ・ It is rain. (品詞の理解、be動詞の意味)
- ・ After ate a lunch, Mary went to the library. (日本語直訳、接続詞の使い方)
- ・ Who did break this window? / Who was broke this window? (疑問文の作り方)
- ・ He is studying English every day. (時制)
- ・ When I was high school... / When I was high school student... (冠詞)
- ・ Almost students attended the meeting. (almostの語法、日本語直訳、品詞の理解)
- ・ Whoes book is this? (スペルミス)
- ・ I want to work as a ground staff in the future. (カタカナ英語、名詞)

いずれも英文法としては、きわめて基礎的な文法項目ばかりである。こうした誤りの原因は、単純な間違い(スペルミス、カタカナ英語)もあるが、主に「基本的な単語の使い方、ルールをよく身に付けていない」、「日本語をそのまま英語にしようとする」という2つのタイプにわかれる。基本的文法の例でいうと、人称代名詞の正しい使い方(特に所有代名詞の形)、疑問文の作り方、be動詞の使い方、品詞(homeやthereなど)の理解、基本的な不規則動詞の活用などで、ほとんどが中学校で学ぶ内容である。また、簡単な単語だが、使い方に注意を要するもの(enjoy, help, almostなど)もあり、中学校や高校等の授業で十分に取扱われていない

のではないかと考えられる。

3. 先行研究

「よくある間違い」に関する先行研究については、松井(1979)が、きわめて重要な存在である。30年以上の英作文の指導経験のなかで学生が毎年同じタイプの誤りをすることに気づき、10年以上にわたっての、「なぜこんな間違いをするのか」という疑問に対する解答をまとめている。学生の作文の誤りを、原因別、文法項目別に詳細に分析して、その多くの原因は「日本語で考えるくせ」に由来していると結論づける。さらに、その具体的な解決策と言ってもよい様々な英作文指導の実践例が示されており、大いに示唆に富む。40年近く前に出版されたものだが、基本的な問題意識とその姿勢は、我々の取り組みを先取りしており、誤りの例についても重なる部分が多い。このことは、本学英語科の学生の誤りの多くが、他の日本人の英語学習者の間違いと大差ないこと、そして、こうした誤りの傾向は40年ほど経てもあまり変わらないということを示している。大学の英語の教科書である小中(2002)は、文法項目ごとに実例がまとめられ、誤った文とそれを訂正した文、それにポイントを押さえた説明が付け加えられており、「よくある間違い」のテキスト版とほぼ同じ狙い、形式をとっている。また、小寺(1989)も英作文指導法の本で、数多くのよくある誤りが「誤りの実例」という項目の中で文法ごとに整理されている。

専門的な研究書とは対照的に「よくある間違い」と同じ趣旨の一般人対象の英語学習書は、かなりの数にのぼる。日本人のおかしやすい誤りの指摘ということであれば、何と言ってもピーターセン(1988)を忘れてはならない。日本人への指導経験が豊富なネイティブスピーカーによる日本語の著書であるというところが新しい点であった。さらに、自身の経験がユーモアを交えてわかりやすく語られており、多くの読者にとって親しみやすい本である。何より、従来の英文法の説明にはなかった「ネイティブの感覚」が示され、日本語の発想と英語の発想の違いを際立たせたという点が画期的で、注目を集めた。これ以降、英語学習書の中で「日本人がおかし英語の間違い」の分野は一定の位置を占め、その多くがネイティブスピーカーの著書である²⁾。

こうした先行研究を参考にすると、「よくある間違い」の多くは、やはり「日本語の思考」に引きずられてること、基本的な規則が身につけていないことの大きく二つのことに原因があるということが明らかになる。また、我々が収集した「よくある間違い」と同じ例が多くみられる。英文法における「日本人の弱点」が明らかになり、文法指導において「日本人がおかしやすい間違い」を知ることは教員側にとっても大変有益である。また、こうした研究書や一般英語学習書の多くが共通するところは、長年にわたる英作文の指導の中から生まれているということであるのも興味深い。

4. 研究の目的と方法

4.1 研究の背景と目的

本研究は、「よくある間違い」(Moodle版)の利用と「英文法Ⅰ」の授業と連携し、「英文法Ⅰ」の授業内で、アクティブラーニング型授業を試み、その有用性を検証するものである。さらに、「よくある間違い」(Moodle版)の教材改善に役立てるとともに、学生が英文法の知識を、英語によるディスカッションや英文レポート等に、応用できるよう授業改善を行うことを目的とする。

溝上(2014)では、アクティブラーニングを、「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」(p.7)と定義している。本研究では学習サイクルの動機づけとなる「よくある間違い」のコンテンツを活用して、実際に問題を解き、解説等で学んだあと、さらにグループで各項目の問題を解き、グループ内でお互いにピアティーチングを実践するものである。学生が「よくある間違い」のコンテンツや「英文法Ⅰ」の授業で学んだことを活用して、お互いに説明し合うことにより、文法理解の深化となり、定着に繋がるのではないかと考えた。

4.2 研究方法

本研究の被験者は平成29年英語科1年生59名(在籍60名中休学者1名)である。本研究はこの英語科1年生を対象に、「よくある間違い」(Moodle版)の利用と、この教材を活用した「英文法Ⅰ」におけるアクティブラーニング型授業の前後で、学生の文法力を図るプレテストとポストテストを実施し、教材と「英文法Ⅰ」のアクティブラーニング型授業の有用性を検証するものである。また、ポストテストと同時に両者に関する学生の意識調査も行った。

「JEB ベーシックス」と「英文法Ⅰ」は1年前期必修科目であるため、全員が履修する。「JEB ベーシックス」の授業の一環で、eラーニング教材の導入をしているため、「JEB ベーシックス」の授業内で、プレテストとポストテスト、アンケートを実施した。「JEB ベーシックス」は初年次教育科目であるため、習熟度別クラス編成ではなく、入学時のクラス分けに従い、クラス単位で授業を行っている。

一方、「英文法Ⅰ」は入学時、プレイスメントテストを行い、習熟度別クラス編成を実施している。昨年度までは、レベルを上級、中級、基礎の3つのクラスに分けていた。しかし、年々、学生の文法力が二極化していることが科目担当者間で明白となっていたため、本年度はレベルを2つに分けることにした。上級と中級を混ぜたクラスを2クラス(24名と23名)、基礎クラスを1クラス(12名)に分けた。

4.2.1 「よくある間違い2017」

「よくある間違い」(Moodle版)は教材開発時、70問の問題とその解説が収められていた。本研究のため、「英文法Ⅰ」(1年次前期開講科目)でカバーする文法項目に絞り、35問の問題と解説のみに編集し、『「よくある間違い」(Moodle版)2017年前期』とした。以下、これを「よ

くある間違い2017」とする。

4.2.2 「英文法Ⅰ」におけるアクティブラーニング型授業

「英文法Ⅰ」が「よくある間違い2017」と連携して扱った項目は、時制、疑問文、代名詞、可算・不可算名詞、不定詞・動名詞の5つである。本研究ではこの5つの文法項目について、アクティブラーニング型授業を行った。従来、アクティブラーニングでは答えが1つになるものは適当ではないとされている。今後は学生のアウトプットとして、英作文をさせる等、より充実した「英文法」の授業を行いたいと考えている。今回の研究ではその第一歩となるため、英文法の問題を扱い、まずは授業の一部を用いて、グループ学習による学生同士のディスカッションを促し、各文法項目の理解を深め、文法の定着があるかどうかを実験した。

アクティブラーニング型授業では、90分の授業のうち、後半30分間を用いた。30分の授業構成は下記のとおりである。

1. 各項目5問の問題を各自解く。(10分)
2. グループで解答を出し合い、解答の理由を考え、説明させる。(10分)
3. 全体で各グループの解答を出し合い、異なる解答がある場合はそれぞれ説明させ、クラス全体で正解を与える。(10分)

使用する問題は上記5つの文法項目について、「英文法Ⅰ」の科目担当者3名が作成した。どのレベルの学生でも、学んだ知識を活かして解答でき、グループ学習で議論しやすいような工夫を行った。例えば、間違いを探し正しく書き直す問題や文法による意味の違いを意識させる問題などを作成した。授業前、宿題として「よくある間違い2017」の指定された箇所を各自30分程度勉強させている。

4.2.3 プレテスト・ポストテストの実施

「JEB ベーシックス」の授業2回目(平成29年4月20日)において、プレテストをMoodle上で実施した。PCルームの収容人数制限のため、「英文法Ⅰ」のクラス編成には関係なく、1クラス(29名と30名)ずつに分けて、順に受験してもらった。入学して間もなく、Moodleの使用に関しても不慣れであったため、「受験上の注意」を作成し、戸惑う学生がいないよう最善の注意を払い実施した。

また、この教材を活用した「英文法Ⅰ」におけるアクティブラーニング型授業後、「JEB ベーシックス」の最後の授業(平成29年7月27日)でプレテストと同じテスト内容をポストテストとして、Moodleで実施した。

4.2.4 アンケートの実施

ポストテスト実施後、すぐにアンケートも実施した。このアンケートは「よくある間違い2017」のコンテンツと英文法の授業の改善のため、大きく2つのことについて尋ねた。1つは「よくある間違い2017」の使用について、2つ目は「英文法Ⅰ」の授業について尋ねた。特に、「英

文法 I」で初めて試みたアクティブラーニング型授業に関する学生たちの意識調査を行い、今後の「英文法 I」の授業改善に役立てたいと考えた。

4.3 仮説

今まで、「JEB ベーシックス」内での「よくある間違い」(Moodle版)利用や自主学習に任せ、化石化している学生の間違いがどれだけ解消されているか検証されていなかった。本研究は「よくある間違い2017」と英文法 I の授業と連携を図るとともに、「英文法 I」の授業内でも、この教材を活用して、アクティブラーニング型授業を試みる。この新しい「英文法 I」の授業スタイルにより、学生の英文法の理解の深化と定着を期待するものである。

5. 結果と考察

5.1. プレテスト・ポストテスト

プレテスト・ポストテストは、「よくある間違い2017」の文法項目を基に作られた60問の問題から成る。プレテストおよびポストテストは、全て同一の問題である。扱う文法項目は、疑問文、時制、代名詞、可算・不可算名詞、不定詞・動名詞、それ以外の項目であり、各10問設けられている。同じ文法項目の問題が3つ以上連続することがないように設問の順序に留意した。

設問の形式は3つあり、正しい文を答える問題が16問、誤りである文を答える問題が18問、文の一部に適する表現を答える問題が26問となっている。全問において、4つの選択肢から正解を1つ選ぶ。

誤りである文を選択する問題では、正しい文が選択肢に複数あり比較できることで、正しい文に共通する文法が確認しやすい。例えば、以下の問題においては、“love”という動詞の後には目的語、つまり名詞が必要である。動詞である“play”が目的語となるためには、動名詞“playing”または to 不定詞の“to play”と名詞化する必要がある。このように、1つの文法項目について、関連する用法・表現と比較しながら日頃から学習しているかが試される。

問題26：次の4つの文の中から、誤っている文を1つ選びなさい。

- a. I love basketball.
- b. I love play basketball.
- c. I love playing basketball.
- d. I love to play basketball.

プレテスト・ポストテストには、「よくある間違い2017」に類似した問題が設けてある。下記に示す通り、誤答となる選択肢には、「よくある間違い2017」の間違いと同じパターンの表現を入れた。

「よくある間違い2017」問題37：

次の3つの文のうち、正しいのはどれでしょうか。1つ選びなさい。

- A. I went there to get many informations.
- B. I went there to get many information.
- C. I went there to get a lot of information.

プレテスト・ポストテスト問題42：

次の文の（ ）に適する表現を選びなさい。

Did they give you () about sightseeing in Nara?

- a. much information
- b. many information
- c. a lot of informations
- d. many informations

プレテスト・ポストテストには、このような基本的な問題のみならず、「よくある間違い2017」の解答解説に関連した応用的な問題も含まれている。例えば、下記に示す通り、不可算名詞について「よくある間違い2017」で“a lot of information”（前述の問題42），“a lot of homework”が正答となる問題があるが、プレテスト・ポストテストでは、この2つに加え、解説に出てくる“furniture”，“luggage”に関する問題も設けられている。

問題47：次の文の（ ）に適する表現を選びなさい。

There are 180 () in this store.

- a. kind of furniture
- b. kinds of furniture
- c. kind of furnitures
- d. kinds of furnitures

問題52：次の文の（ ）に適する表現を選びなさい。

How many () did you check in?

- a. luggage
- b. luggages
- c. pieces of luggage
- d. pieces of luggages

これらの問題においては、基本的な不可算名詞がわかるだけでなく、不可算名詞を数えなければならない場合はどのような表現を用いるのかという応用力も試される。このような問題の解答を見ることで、発展的な学習がなされているか、ある程度の傾向を知ることができる。

5.2 5つの文法項目別テスト結果

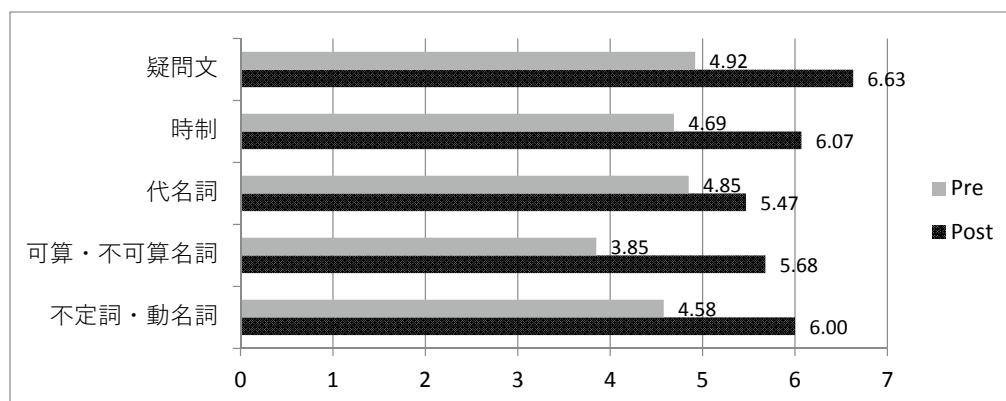
プレテストとポストテストは同一問題を使用し、今回取り上げたのは5つの文法項目（疑問文、時制、代名詞、可算・不可算名詞、不定詞・動名詞）のテスト結果についてである。テストは、各文法項目につき10問ずつ出題し合計50問あり、1問1点で計算し合計50点である。表1は、そのテスト結果を示している。全体として、プレテストの合計平均は22.88点（45.8%）であったが、ポストテストの合計平均は29.85点（59.7%）と上昇している。合計と5つの文法項目別に、プレテストとポストテストの点数に差があるかどうかについてt検定を実施したところ、すべてについて統計的に有意な差が認められた。つまり、学生たちは、「よくある間違い2017」を活用し、アクティブラーニング型英文法の授業を受けることにより、英文法の5つの項目について理解を深め文法力が向上したことがわかった。

表1 英文法テストの結果

	疑問文		時制		代名詞		可算・不可算名詞		不定詞・動名詞		合計 50点	
	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post	Pre	Post
人数	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59
平均	4.92	6.63	4.69	6.07	4.85	5.47	3.85	5.68	4.58	6.00	22.88	29.85
標準偏差	1.91	1.85	1.95	1.80	2.09	2.14	1.91	2.07	1.85	2.10	6.09	7.90
平均値の差	1.71		1.38		0.62		1.83		1.42		6.97	
自由度 df	58		58		58		58		58		58	
t	-7.30		-5.71		-2.39		-5.93		-5.16		-10.15	
ρ	.000*		.000*		0.020**		.000*		.000*		.000*	

注) 各セクションは10点満点で合計50点満点。* $\rho < .01$, ** $\rho < .05$

図1が示すように、すべての項目において平均値が上がっている。ポストテストで一番平均値が上昇したのは、可算・不可算名詞で、プレテストの平均値は3.85点、ポストテストの平均値が5.68点、平均値の差が1.83点である。点数が上昇した順では、疑問文(平均値の差が1.71点)、不定詞・動名詞(平均値の差が1.42点)と続く。代名詞の伸びは最も低く0.62点であり、ポストテストの平均値も一番低いため、これら5つの文法項目の中では、一番定着が悪いといえる。



(単位：点)

図1 プレテストとポストテストの文法項目別比較

5.3 問題別テスト結果 定着のよくない文法事項 (誤答分析)

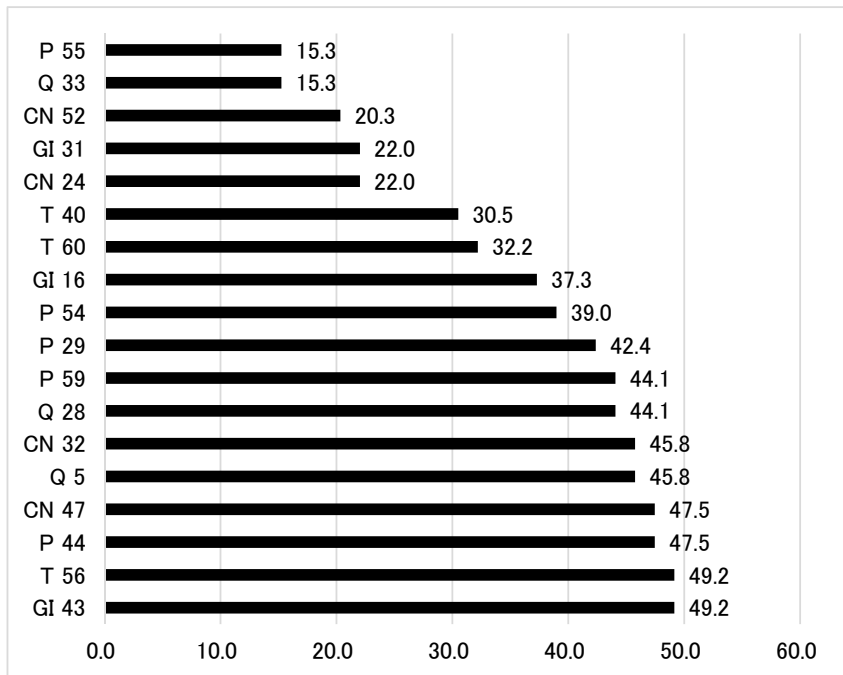
図2は、50問の問題別にポストテストの結果を比較し、ポストテストの正解率が50%に満たない問題の正解率を示している。図3は、プレテストとポストテストの差(伸び)を比較し正解率の差が10%未満を示している。縦軸のアルファベットPは代名詞、Qは疑問文、CNは可算・不可算名詞、Tは時制、GIは不定詞・動名詞を表し、アルファベットの次の番号は問題番号を表している。両方に共通している学生が苦手な問題、つまり、ポストテストの正解率が50%未満でかつプレテストとポストテストの正解率の差(伸び)が10%未満であった問題は、55、33、59、29、40、52、47、60、54の9問である。学生たちはどのような間違いをしているのであろうか。

ポストテストで最も点数が低く伸びも最低だったのは、55番と33番である。両問題とも、ポストテストの正解率は15.3%、プレテストより正解率が5.1%下がっており、理解が最も不十分な文法事項の1つといえる。代名詞の問題55番は、下記のとおり、空欄を埋めるのに適切な語句を選ぶ問題である。答えの選択肢とその人数及び割合は以下のとおりである。

問題55 : Every () an electronic dictionary.	
a. student in this class has	9人 (15.3%)
b. student in this class have	11人 (18.6%)
c. students in this class has	12人 (20.3%)
d. students in this class have	26人 (44.1%)
無回答	1人 (1.7%)

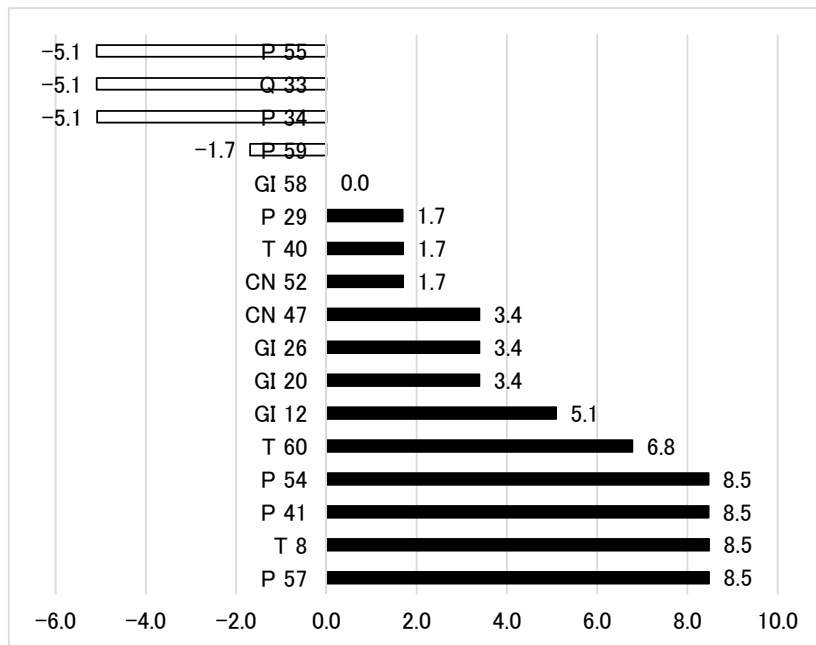
正解の a を選んだ学生が一番少なく、d を選んだ学生が多い。「よくある間違い2017」でも、「everyのついた名詞は、その個々の要素に言及するためすべて単数になる」と解説しているが、everyは「どの・すべての」という意味を表すため、allと同様に複数形をつけてしまうという間違いが多いと考えられる。

疑問文の問題33番は、4つの文から誤文を1つ選択する問題である。How do you call this in English? が誤りであるが、What do you call this in English? を選んだ学生が21人 (35.6%) で1番多かった。これは、「～をどう思う?」という日本語に引きずられた間違いである。「よくある間違い」でも同様の例を挙げて解説しているが、理解が乏しくまったく定着しなかった文法事項といえる。



(単位：%)

図2 ポストテストで正解率が50%未満の問題と正解率



(単位：%)

図3 プレテストとポストテストの正解率の差が10%未満の問題とその差

ポストテストの正解率が1.7%下がった代名詞の問題59番は、下記の文の空欄を埋めるのに適切な語句を選ぶ問題である。

問題59 : I got a Christmas present for my sister yesterday. I am going to buy () for my brothers this week.

- | | |
|-----------|-------------|
| a. ones | 26人 (44.1%) |
| b. others | 16人 (27.1%) |
| c. them | 12人 (20.3%) |
| d. those | 5人 (8.5%) |

正解の ones を選んだ学生が1番多いが、others や them を選んだ学生も半数近くいる。正解率が低かった要因の一つとして、この文法項目については「よくある間違い2017」で解説されていなかったことが考えられる。授業中グループで検討する練習問題として取り扱っていたが、学生たちは文法事項についてより多くの情報を得ることで混乱し、定着しなかったかもしれない。

正解率が1.7%しか伸びなかった29番は代名詞の誤文を選択する問題である。正解の誤文、Mari is one of the my good friends. を選択したのは25人 (42.4%) である。しかし、Mari is one of my good friends. を誤りと答えた学生が16人 (27.1%)、Mari is a good friend of mine. を誤文と解答した学生も13人 (22%) いた。「よくある間違い2017」において、「冠詞、人称代名詞の所有格、指示代名詞は同時に一つの名詞を修飾することはない」と解説し、同様の問題の誤文訂正をさせている。しかしながら、プレテストよりほとんど理解が向上しない結果となり、今後指導方法の改善が必要な文法事項といえる。

40番は、The plane () at the airport just now. の空欄を埋めるのに適切な時制を選ぶものである。正解の arrived を選択した学生は3割しかいない。have arrived の現在完了形を選択した学生が一番多く20人 (33.9%)、単純現在時制の arrives を選択した学生も13人 (22%) いる。just now は「たった今」という意味で過去時制と一緒に使うのが普通であるが、now という単語から現在時制と考えた学生や just があることから「たった今終えた」完了形を意味すると勘違いした学生がいたと推察される。この問題に関しては、「よくある間違い2017」では取り扱っていないこと、また、授業中の練習問題でも取り扱わなかったことが、正解率の低さと伸びの低さに影響していると思われる。

52番は、How many () did you check in? の空欄を埋める可算・不可算名詞の問題である。誤答の luggages を選んだ学生が38人 (64.4%) おり、正解の pieces of luggage を選んだ学生 (12人, 20.3%) の3倍以上に及ぶ。「よくある間違い2017」の解説では、間違いやすい不可算名詞として homework, luggage, furniture などが挙げられており、例文の homework を含む問題39番の正解率は88.1%と高かったが、他の不可算名詞を覚えている学生が少なかったようである。今後、学生たちがいかに多くの不可算名詞を理解し覚えるかが課題である。

47番は、There are 180 () in this store. の空欄を埋める可算・不可算名詞の問題である。正解の kinds of furniture を選択した学生は5割近くいたが、プレテストとポス

トテストの伸びの差が3.4%しかなかった。不正解の kind of furnitures (14人, 23.7%) や kind of furniture (10人, 17.0%) を選択している学生は、まだ、furniture を不可算名詞として理解していないこと、また、その前につける数量を表す表現を理解できていないと考えられる。

60番は、Let's finish the work in the garden before it () dark. の空欄を埋める時制の問題である。誤答の is getting を選んだ学生が一番多く28人(47.5%)おり、will get と解答した学生も11人(18.6%)いる。正解の gets を選択したのはプレテストで15人(25.4%)、ポストテストで19人(32.2%)であるが、プレテストで正解していてもポストテストで不正解だった学生が7人いる。「よくある間違い2017」において、「時・条件を表す副詞節の中での現在時制は未来時制の代わりをするというのはとても重要な文法事項」と記載し解説しており、授業においても練習問題や小テストの中で取り扱っている。それにもかかわらず、ポストテストの正解率とその伸びが低いのは何故だろうか。1つの要因として、It is getting dark. という表現を会話でよく使うため、耳慣れた表現を選択したことが考えられるが、今後の検討課題である。

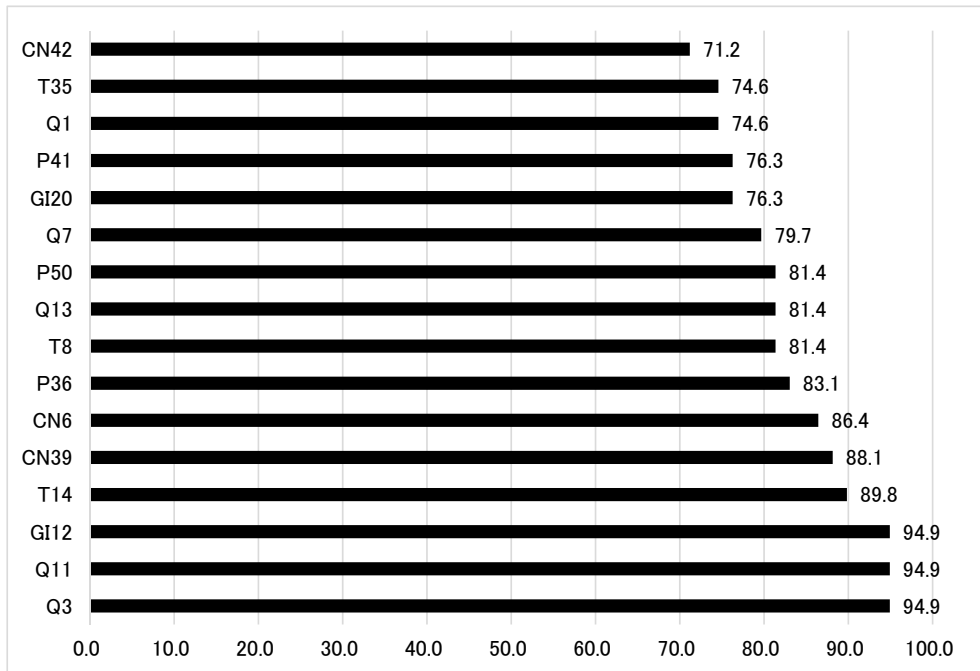
54番は、I like casual clothes. () more comfortable. の空欄を埋める代名詞の問題である。正解の They are を選択した学生は約4割であるが、These are が19人(32.2%)、It is が13人(22%)いる。この場合の適切な代名詞は、clothes を複数形として理解できた上で they を選択しなければならない。これは、「よくある間違い」で特に取り上げられた文法事項ではなかったことも、正解率(39%)と伸び率(8.5%)が低かった要因と考えられる。

5.4 問題別テスト結果 定着の良い文法事項

「よくある間違い2017」を活用したアクティブラーニング型授業の効果が最も現れた文法事項はどれであろうか。図4はポストテストで正解率が70%以上の問題と正解率を示している。図5はプレテストとポストテストの正解率の差が20%以上の問題とその差を示している。伸び(差)が大きかった問題を文法項目で分けると、疑問文が5問、可算・不可算名詞が4問、不定詞・動名詞が3問、時制が2問である。代名詞は1問もない。伸び(差)が大きかった問題は、CN39, GI53, GI2, CN6, Q15, CN32 の順になっている。

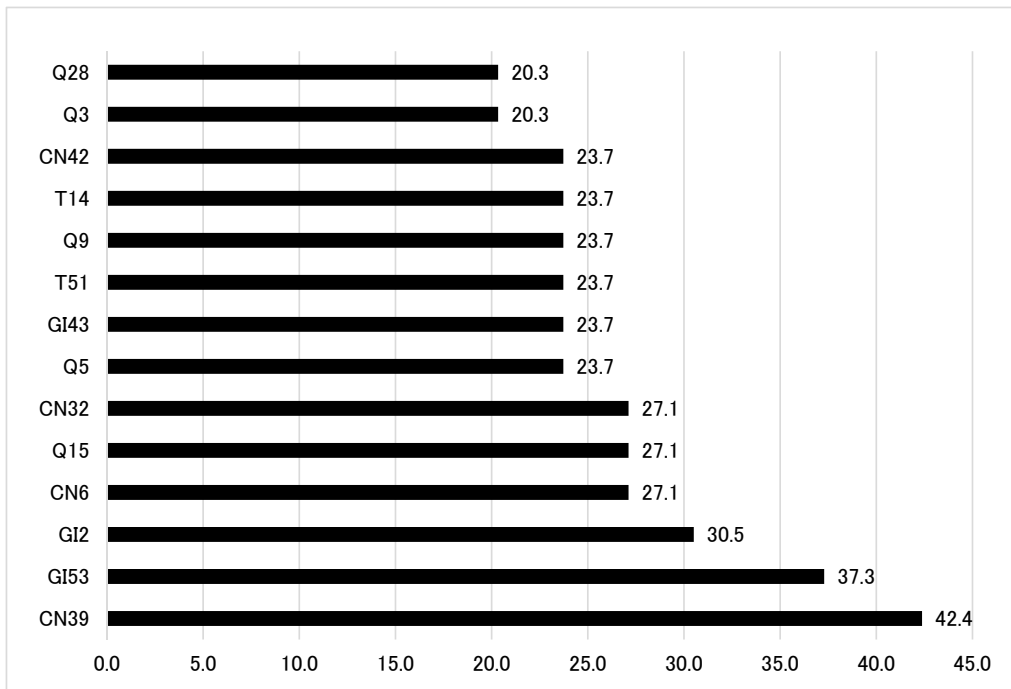
最も伸び(差)が大きかった問題39は、可算・不可算名詞の問題で、We have () to do this week. の空欄を埋める問題である。正解の a lot of homework を選択した学生は52人(88.1%)おり、その差は42.4%である。プレテストでは不正解の many homeworks や a lot of homeworks を選択した学生がどちらも14人(23.7%)いたが、それは間違いであると理解し、homework は数えられない名詞として定着したようである。要因の1つとして、英文法の授業だけでなく、他の専門教育科目においても homework は不可算名詞であるということを学ぶ機会が多いことが考えられる。

正解率の伸びが次に大きいのは、不定詞・動名詞の問題53番である。Jenny and her family go () Kirishima every summer. の空欄を補充する問題である。正解の camping in を選択した学生はプレテストでは18人(30.5%)しかいなかったが、ポストテストではその倍以上の40人(67.8%)まで上昇している。「よくある間違い2017」は「買い物に行く」という場合、go to shopping は誤りであるという例文を挙げて解説していたが、例文以外の go-ing をとる語句も含めて文法事項が身につけてきていると推測できる。



(単位：%)

図4 ポストテストで正解率が70%以上の問題と正解率



(単位：%)

図5 プレテストとポストテストの正解率の差が20%以上の問題とその差

2番は、下記の4つの文から正解を選択する不定詞・動名詞の問題である。()内は、プレテストとポストテストの選択割合を示す。

- a. We are used to getting up early in the morning. (pre 27. 1, post 57. 6)
- b. We are used to get up early in the morning. (pre 35. 6, post 20. 3)
- c. We used to getting up early in the morning. (pre 27. 1, post 20. 3)
- d. We used to be gotten up early in the morning. (pre 10. 2, post 1. 7)

正解はaである。プレテストの正解は16人(27.1%)しかいなかったが、ポストテストでは34人(57.6%)と約2倍になっている。また、bとcの選択者が減少しており、「be used to+動名詞/名詞相当語句」は「～するのに慣れている」の意味で、「used to+動詞の原形」は「～したものだ」という意味を表すという文法事項もかなり定着したと考えられる。

ポストテストの正解率が70%以上で、プレテストとポストテストの正解率の差が20%以上である問題は、CN39, CN6, CN42, Q3の4問である。CN39とCN6については上述したので、残りの2問について考察したい。42番は、Did they give you () about sightseeing in Nara?の空欄を補充する可算・不可算名詞の問題である。正解のmuch informationを選択した学生は42人(71.2%)おり、プレテストに比べ正解率も23.7%高い。「よくある間違い2017」においても、同様の例文を取り上げて解説しているが、informationが数えられない名詞であり、また、疑問文においてはa lot ofよりmuchを使うのが普通であるということも理解できるようになってきていると思われる。

9番は、4つの文から正しい文を選ぶ疑問文の問題である。Must we return the book to the library by Monday?が正解であり、ポストテストの正解率が7割、伸びが23.7%となっている。助動詞がある疑問文は、助動詞を文頭に置くことやhave toのhaveは一般動詞と同じ扱いをするため、Have we return ~?は間違いであり、Do we have to return ~?が正解であることも理解した上で、正解を選択できた学生が増加したと考えられる。

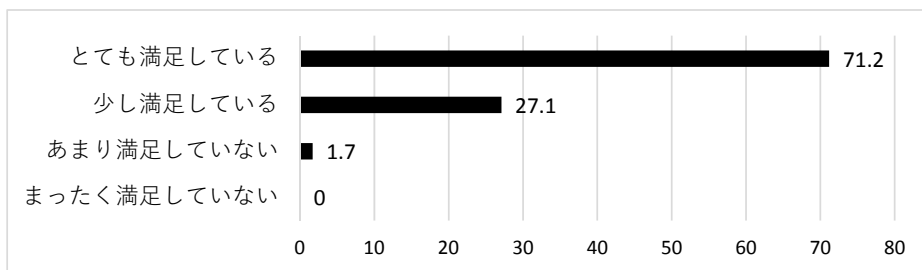
上述のように、「よくある間違い2017」の教材を活用し、「英文法I」の授業でアクティブラーニング型授業を試みた結果、特に、可算・不可算名詞の文法項目において理解の深化と定着を図ることができた。しかしながら、定着しなかった文法事項があることも判明した。今後、理解や定着の悪かった文法事項について、授業内容や方法の改善を検討したいと考える。

6. アンケートの結果

4.2.4で述べたように、ポストテストを受験後、すぐにMoodle上でアンケートを実施した。このアンケートは「よくある間違い2017」の活用とアクティブラーニング型授業を行った「英文法I」について、2つのパートに分け回答を求めた。本研究では全てのアンケート結果を記載することが不可能であるため、主なものだけを取り上げ、詳細については今後の研究につなげたい。

6.1 「よくある間違い2017」の活用

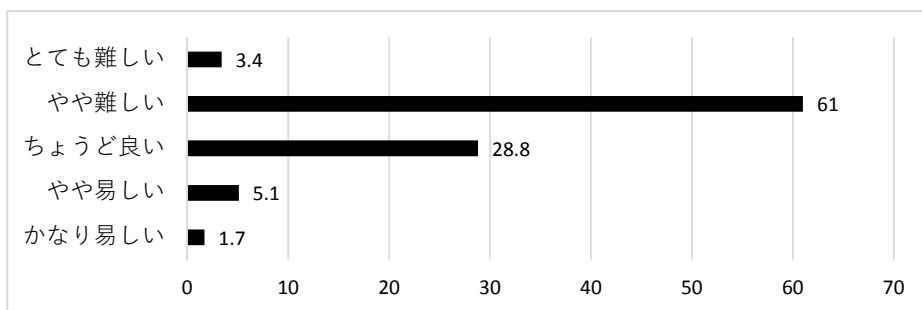
まず、コンテンツ学習の満足度を尋ねると下記の結果となった。



(単位：%)

図6 コンテンツ学習の満足度

42名 (71.2%) が「とても満足している」、16名 (27.1%) が「少し満足している」、1名 (1.7%) が「あまり満足していない」と回答した。ほぼ全員が満足していることを示し、学生のニーズにあった問題と解説になっていることがわかる。コンテンツの問題に対する難易度は次のとおりである。

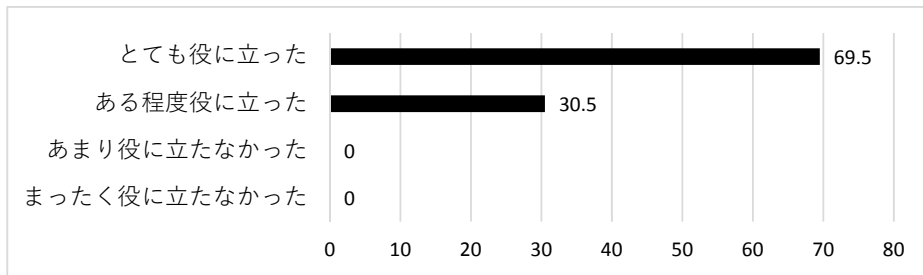


(単位：%)

図7 コンテンツの難易度

「やや難しい」と回答した学生が36名 (61.0%)、「ちょうど良い」と回答した学生が17名 (28.8%) いた。これが示しているのは、過去の学生たちがしていた「間違い」を、現在の学生たちも同じように、「間違い」に気づかず使用しており、問題の解答がやや難しいと感じているのではないかとと思われる。「とても難しい」と回答した学生が2名 (3.4%) にとどまっております。コンテンツの問題の難易度については適当であると考えます。

次に、文法項目の理解に対して、このコンテンツの有益度について尋ねた。結果は下記のとおりである。



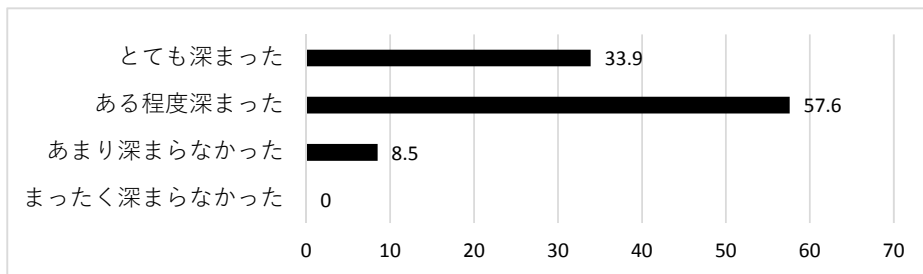
(単位：%)

図8 コンテンツの有益度

図8にあるように、41名(69.5%)が「とても役に立った」と回答し、18名(30.5%)が「ある程度役に立った」と回答した。このように、全員の学生がこのコンテンツ学習を行うことで、各自の間違った英語使用に気づくことができ、文法理解に役だったという回答をしたことになる。学生はこのコンテンツで学習することで意識を高めることができていることがわかる。

6.2 アクティブラーニング型授業を行った「英文法Ⅰ」

「英文法Ⅰ」では、5つの文法項目について、アクティブラーニング型授業を試みた。まず、その中心となるグループ学習後の理解度について尋ねた。

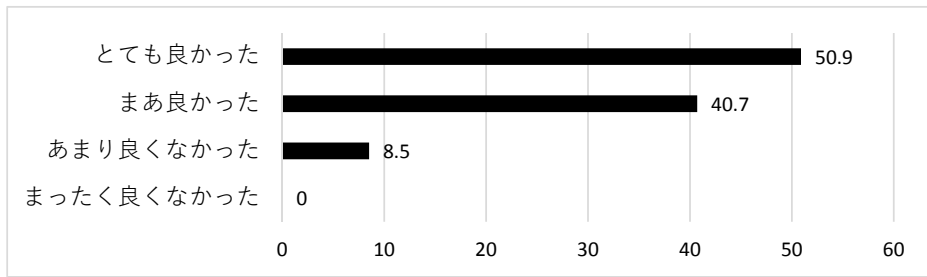


(単位：%)

図9 グループ学習後の理解度

「とても深まった」と回答した学生が20名(33.9%)、「ある程度深まった」と回答した学生が34名(57.6%)いた。9割以上の学生がグループ学習後に文法の理解度が深まったと回答しているが、5人(8.5%)の学生が「あまり深まらなかった」と回答した。次の問いの回答と関連があるため、先に次の問いの結果を示し考察することにする。

次にグループ学習を行ったことに対して、どのように感じたかを尋ね、下記の結果が得られた。



(単位：%)

図10 グループ活動の評価

図10にあるように、「とても良かった」と回答した学生は30名 (50.9%)、「まあ良かった」と回答した学生は24名 (40.7%)であった。9割を超える学生がグループ活動を評価していることがわかった。しかし、前問の「グループ活動後の理解度」と同様、「あまり良くなかった」と回答した学生が5名 (8.5%)いた。

グループ活動の評価に対する理由を記述式で回答してもらったと次のような回答が多かった。9割が肯定的な理由があり、下記にいくつか挙げる。

- ・人と話し合うことで自分の考えを発信し、他人の考えを盗むことができるから。また、話し合うことで自分の考えの正しさなどを再確認できたと思う。そして、納得して間違いを直すこともできたのでとても良かったと思う。
- ・自分がわからない所を友達が理解していたのでなぜその答えになるのかというところまで追求できたし、自分も友達に教えるに当たりもう一度参考書で確認してから教えるなど自分の勉強になったから。
- ・グループの人たちの意見を聞くことができ、足りない部分、知識を補い合うことができたので協力し合いながら文法を覚えていくことができた。グループで確認し合うと自分が苦手な部分もわかってきた気がしてよかった。

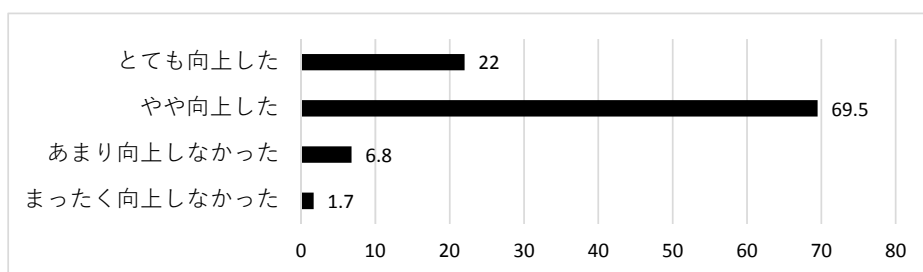
上記のように、グループ学習を行うことにより、今まで気づいていなかった間違いに気づくことができ、グループで考えることで、定着しやすくなったと考える学生が多かった。一方で、否定的に捉えている学生の記述を下記に挙げる。()は同意見の学生数をまとめた。

- ・グループ活動もいいが、自分一人ですべて、先生に質問に行くということのほうが自分には合っているから。
- ・周りに人が座っていなかったので、いつも隣と二人で話すしかなく、二人ともわからなくて困ったことが多々あった。
- ・あまり自分の英語力が上達しなかったから。
- ・分からない人に教えることはとても勉強になってよかったと思ったが、どうしても無駄話が出てしまうことがあるので、それなら一人でやるほうがよいと思うこともあった。

・「英文法」の授業の中で、あまりグループ活動をしなかったから。(3)

以上のことから、「グループ活動後の理解度」と「グループ活動の評価」で、否定的な回答をした理由はそもそも「グループ活動」をしたという意識が希薄な学生がいたということがわかる。3グループに分かれて授業を行っているため、教員の授業のやり方にも差があることを示している。また、「グループ活動」が苦手を感じる学生もいるということがわかった。

次に「よくある間違い2017」で学習し、「英文法Ⅰ」でグループ活動を行ったことで、どのくらい英文法の力が向上したかを尋ねた。

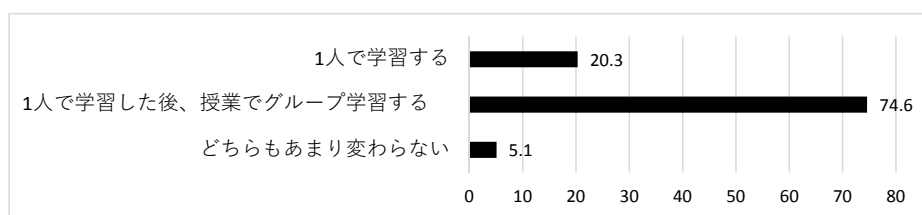


(単位：%)

図11 グループ学習後の文法力向上

図11が示す通り、「とても向上した」と回答した学生が13名(22.0%)、「やや向上した」と回答した学生が41名(69.5%)いた。やはり9割以上の学生がグループ学習により、実際に協同して取り組み、説明し合うことにより、文法力が向上したと感じている。一方で、「あまり向上しなかった」と回答した学生が4名(6.8%)、「まったく向上しなかった」と回答した学生が1名(1.7%)であった。やはり、グループ学習後の文法力向上についても5名(8.5%)の学生が否定的に捉えていることも一貫している。

次に「よくある間違い2017」を1人で学習する場合と、その後、授業でグループ学習をする場合とどちらが良いかを尋ねた。



(単位：%)

図12 学習スタイルの嗜好性

図12が示す通り、44名(74.6%)が「1人でコンテンツ学習した後、授業でグループ学習する」を選び、12名(20.3%)が「1人で学習する」、3名(5.1%)が「どちらもあまり変わらない」と回答した。グループ活動を行うこと好む理由としては、先に挙げた「グループ活動の評

価」理由と重なるため、ここでは割愛する。一方で「1人でコンテンツ学習した後、授業でグループ学習する」ことに否定的であった学生の理由を自由記述からまとめると下記ようになる。() は同意見の学生数をまとめた。

- ・自分の意見がないと積極的に参加できないから。
- ・自分で教科書を見ても理解できるから。
- ・あまり、隣と話すことが効果的だったようには感じなかったため。
- ・1人で学習したほうが、集中でき、自分のペースで進めることができるから。(8)
- ・グループ学習をしても回答が導き出せないこともあるから。それなら個人でじっくり考えたほうが記憶にも残ると思ったから。
- ・文法の勉強をするのに話し合ったりする必要はないと思うから。

このように、15名(25.4%)の学生がグループ学習に対し、懐疑的であることがわかった。また、学生の中には協同で何かをするということに苦手意識を持っている学生がいることも明らかになった。

6.3 アクティブラーニング型授業の再考

5章にあるように、「よくある間違い2017」を活用し、「英文法 I」におけるアクティブラーニング型授業に行ったことにより、学生の文法力は向上したことがわかる。ただ、アンケート結果から、約7割の学生がこの学習スタイルを好んでいたが、約3割の学生は好んでいないということがわかった。今回初めて試みたアクティブラーニング型授業には解決すべき点があることを示している。松下(2015)に指摘されているように、本研究では学生の学習スタイルの多様性を考慮できていなかった。つまり、1人で学習した方がよいと感じる学生にとって、他の学生たちの考え方に触れることで、答えを導くプロセスには様々な方法があることなどを学ぶ活動にならなかったということである。さらに、アクティブラーニング型授業を30分という短い時間で行うことにも限界があった。グループ学習をした意識が薄かったのもこのようなことが原因ではないかと思う。今後はこのアクティブラーニング型授業の授業内容・方法や時間等の改善を図りたいと考える。

7. まとめ

今回、学力的に多様な学生に対応するべく、「英文法 I・II」の授業改善として、従来より「JEB ベーシックス」で使用していた教材「よくある間違い」(Moodle版)を利用し、さらにアクティブラーニング型の授業を導入した。本稿では、この取り組みに対する分析、検証を行った。「疑問文」、「時制」、「代名詞」、「可算・不可算名詞」、「不定詞・動名詞」という文法項目についてプレテストとポストテストを行い、その点数には、いずれの文法項目についても統計的に有意な差が認められ、学生が理解を深め、文法力を向上させたことがわかった。また、アンケート結果によっても、教材としての「よくある間違い2017」、アクティブラーニング型の授業に対

する満足度も高かった。グループ学習によって、不明なところを納得できるまで共に考え、お互いに教えあうことができ、学んだことをしっかりと定着させることができたようである。以上のような分析・検証の結果から、この取り組みは一定の成果を得たといえることができる。ただし、同時に、定着があまり良くなかった文法項目、「よくある間違い2017」の足りない点やアクティブラーニング型の授業に関して改善していくべき点が明らかとなったのも確かである。ここで得られた結果をふまえて、今後も改善を続けながら、「よくある間違い」(Moodle版)を活用したアクティブラーニング型の授業で、学生が英文法を実践的に身に付けることができるように努めたい。

注

- 1) 「生活英語実習Ⅰ・Ⅱ」という科目は、英語学習寮での学びを単位化したものである。「英文日記」学生は全員一週間分の日記を英語で担当の教員へ提出、添削指導を受ける。一日分はノート1ページ、およそ100～120語程度である。当然のことながら、「英文日記」は評価され、「生活英語実習Ⅰ・Ⅱ」の成績の一部となる。
- 2) 主な著者をあげると、デイビット・セイン、デビット・バーガー、T. D. ミントン、ジェイムズ H. M. ウェブ、ジェームス M. バダーマンらである。特にセインには『ニッポン人のヘンな英語』をはじめ多数の著書がある。

参考文献

- ウェブ、ジェイムズ H. M. (2006) 『日本人に共通する英語のミス151 [増補改訂版]』 ジャパンタイムズ。
- 鹿児島純心女子短期大学英語教育研究会編(2006) 『体験型英語教育の全容—短期大学の挑戦—』 高城書房。
- 小寺茂明 (1989) 『日英語の対比で教える英作文』 英語指導法叢書 大修館書店。
- 小中秀彦 (2002) 『誤りから学ぶ日常英語の基礎表現』 青踏社。
- セイン、デイビット (2005) 『ニッポン人のヘンな英語』 日本文芸社。
- バーガー、デビット (2008) 『英語じょうずになる事典』 アルク。
- バダーマン、ジェームス M. (2013) 『気がつけばバイリンガル 英語のワナにはまるな!』 IBCパブリッシング株式会社。
- 松井恵美 (1979) 『英作文における日本人的誤り』 大修館書店。
- 松下佳代 (2015) 「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」 松下佳代編 『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』 (pp. 1-27). 勁草書房。
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂。
- ミントン, T. D. (1999) 『ここがおかしい日本人の英文法』 研究社。
- ミントン, T. D. (2002) 『ここがおかしい日本人の英文法Ⅱ』 研究社。
- ミントン, T. D. (2004) 『ここがおかしい日本人の英文法Ⅲ』 研究社。

ピーターセン, マーク (1988) 『日本人の英語』 岩波新書18 岩波書店.

ピーターセン, マーク (1990) 『続 日本人の英語』 岩波新書139 岩波書店.

ピーターセン, マーク (2013) 『実践 日本人の英語』 岩波新書1420 岩波書店.